賴山陽を想ふ（承前）

石島快隆

山陽の史書に於ける重要精神は、先づ其天職論を擧げざる可からず。抑ゝ我國は萬世一系の天子嚴として君臨す。漢土の幾王朝を代ふるが如きと同日の談に非ず。即ち祖宗を仰ぐ臣子の精神に於ても同斷たるべし。故に政記に、祖宗の源始する所、亦臣子の知らざる可からざる者にして、漢人の軒羲を語るが如きに非ざるなりといふ。而して彼によれば、我王道は天祖より以來、治民の外になく、神道と稱するも亦これのみ。故に治民の王道以外に於て神道をいふ者は、荒誕なる私說を樹つる者なりとす。王業の衰ふるや、權臣跋扈す。後三條天皇恢復の治をはかり給ふ。また王道の擴張に外ならず。蓋、民治を第一とし給ふを取るなり。撫民は王政の興隆する所以なり。賴朝の覇業をなせる所以も、王道に準ぜる爲のみ。北條氏の悖逆極まれる者にして、猶九世に傳ふるを得し所以も亦治民の王道を襲へるによる。故に王道を忘れば、王家も亦王權を失墜するに至る事止むなきなり。王權下に移る所以此にあり。治民の事たるや天職なり。天の治者を立つるは、民の爲にするものにして、其職を忽にせば、天豈之を聽さんや。然れども、天職は時として下に移るべし、天位は易ふ可からざるなり。皇位は神勅に明なるが如く萬世不易なり。王道の弛廢によりて變化すべきは天職のみ。故に北條氏の盛事も、唯王道の意を得るに庶幾きが爲に外ならず。若し天位ありて天職を行はゞ、上古聖世期して待つべし。彼の高時の滅びたるは、天之を滅ぼせるなり。後醍醐天皇中興の業の弛廢せるも天爲なり。王道行はれざれば、天位ありと雖も天職歸せず、況や天位なきをや。

天職は撫民にして治權の所在なり。其權を負み、以て其下に驕りて恤まざれば、實權却つて奪はるる事となる。然れ

ども、變遷するものは天職にして、終に變ぜざるもの存す。是我國の漢土と異なる所以なり。但、其不變者も、祖宗撫民の久しき結果にして、是亦天なりとのみ言はゞ、臣ありての君となす漢土の思想に歸する畏なき能はず。山陽の天位を論ずるや、明確に神勅の由來、建國の體制より起す事をなさず。天の思想、動もすれば漢土のそれに紛はしきは惜しむべし。親房も賴朝及び北條氏の善政を推稱し、朝廷この期に於て政權恢復をはかる擧をなす事の誤れるを指摘し、これにまさる程の德政なくして、いかでたやすく覆へさるべき、たとひ又失はれぬべくとも、民やすかるまじくば、上天よも與し給はじといふ所、山陽亦規を同じうす。然も究極に於て、親房が神國思想より說き起したるに比すれば、山陽の說、頗遺憾なき能はず。彼が說く天人の心といふもの、結局、治民撫民の存する所に嚮ふ事前論の如し。故に現實としては、頗る民主的所論といはざるを得ず。彼の南北合一を論ずる正統論も、其語其志は固より壯なりと雖も、畢竟、蓋し天祖宗と實に之を佑くの一語に歸すべし。而して山陽の當時に至る事實を說きて、其後內紛紜有りと雖も、天命大に定まり以て今に至るといふに至りては、其紛飾を去るも漢土の思想を認めざるを得ず。夫れ、治民の所在、天命の所在なりとして、此に天職天位を論ずる時、長き治民の傳統の力によりて萬古不動となれるものが天位なりとなすに過ぎずとせば、勢の移る所によりて天職を行使する彼の覇者にして、若し更に皇祖皇宗の治民七百八百の長年月に越え、より久しきに亘りて撫民の實を施すものあらんには如何。かくても猶天位不易となすを得べきや。吾人が山陽の主張の根柢に漢土思想の拭ふ可からざるものあるを感ぜざるを得ざる所以此にあり。山陽の修史に遺憾とする所は、記紀神代の卷の精神をも錄して親房の如くならざりし事なり。山陽が國史に通ぜるは、必ずしも枝末の史實のみといふべからず。然も彼亦畢竟儒者たるを免れざりし者か。但、彼の表現上の缺陷は、直に國體精神の缺乏を意味するものには非ず。山陽が尊皇の志の厚き事は、全著書に溢れたる事實なり。故に又志を憫みて、他を罪する事なかるべきものか。

山陽の思想的根柢を示すものは、神儒佛に對する態度に於て發見せらるべし。彼によれば、佛敎は君父を易ふる害あるも、儒敎は人倫を敍して我固有の道を弘むるもの故、同じく外來といふも自ら別ありといふ。此見解に基づきて彼は

佛教を信ずる者に無道の輩出づとなす。彼によれば、王業の衰ふる大端は、厩戸、馬子にあり。而して我萬國無比の國體を破壞せしむるに至りしものは、實に佛教が其根本動因たり。然るに後に織田氏ありて、千載の下、獨り惑はず、祖宗の國を匡正すといふ。山陽にして猶儒學に私なき能はざりしか。彼が空言を弄すと難ぜらるゝ事も全然所以なしとせず。聖武天皇を論じては、玄昉を難ずるの餘、帝の不君柔暗、智者を待たずして知ると極論して憚らず。聖武の皇女、稱德孝謙を論じては、則天に比し、悍且淫となして道鏡仲滿の汚濁を表さんとし、清麻呂の氣節を表すに於ては、何物を犧牲となすも憚らざるが如き、果して私曲なしといふを得べきか。又、鎌倉、室町の事、禪教の致す所となす說、北條氏修禪學論に特に詳論するあり。彼の室町五刹の隆、鎌倉五山の右に出づるを以て、室町の僭竊、鎌倉に什倍する由を知るとなすに至る。彼が讀本居氏家言とて論ずる所、大體に於て公論に似たるも、佛教に對する所論よりせば、結局、自家辯護に過ぎずとの誹を免れざるべし。宣長の門人、橋本稻彥交友たり。稻彥が山陽に對して、漢文を讀み、漢文は書くとも、我國の古道を忘れざる樣注意すべきを忠告する所あり。山陽果して儒學に私する所の事實なしといふを得べきか。然るに、此の如く佛教を排斥し、所謂の神道を誹謗しつゝある彼に於て、實際は、雲華をはじめ僧侶との交情少からず、又、稻彥、景樹等の國學者とも親交淺からざるものあり。彼が矛盾の人たる此も亦例すべし。

次に封建制度確立の眞個人物を指摘せる見解に一家言あり。抑〻武家政治は清盛に始まり、賴朝に成る事明なり。然らば、賴朝の覇業を成さしめし者は何人ぞ。山陽曰く、大江廣元是なりと。廣元にして賴朝を來り助くるなくんば、東邊の一武弁、天下統一の業を成す等、思もよらず。廣元、朝にありて用ゐらるゝ所なし。經濟の抱負施すを得ざるに苦しむ。賴朝の興るに及びて、乃ち以て己が素志を行はんとす。其當を得ずして、王室に害をなすに至る。何ぞ率ゐて以て王室に力を致す事に思を馳せざりしや。これ廣元が、賴朝をして覇業を成さしめしもの己が利を圖る以外に出でず、又北條氏を助けて源氏を無視して憚らざりし所以なりと。文集外集、又大江廣元論あり。政記の說に同じ。山陽が經濟を論じ、實用を主張するに當り、廣元の如きは誠に理想的人物の一人たるを失はざるべし。然れども其適用の地を誤り

しを如何せん。加之、大江氏は、朝に在る名家たり。經濟の事、名家の獨占すべきものに非ず。即ち、人才登庸の途なきを論じ、政治の行き詰る原因を此に指摘する所、山陽の志を知るに足る。廣元、封建の基を成して王政を破壞す。果して然らば、此に山陽持論の如き佛教の原因は認むべきものなくして、却つて儒教士大夫の過失あるのみなるは一大奇觀たるを失はず。大江氏と共に、朝より來りて賴朝を助けしは同じく世儒三善氏たり。又以て山陽に辯あるか。但、古の三善清行に至りては、崇敬措かざるものあり。或は十二封事を激賞し、其人物、菅公も及ばずとなし、此人を用ゐざる延喜の政治も空名にして無實たるかと疑ふに至る。經濟の志を抱きつゝ、終に施す所なかりしは清行なり。然れども其不當に用ゐざりしは、寧ろ山陽の以て安んずる所なるが如し。政記の意を案ずるに、山陽の本意遽かに知るに由なしと雖も、出でて廣元たらんよりは、退きて清行たらんことを希ひ、彼自らも隱處士として終るに如かずとなすものに似たり。而して封建、廣元に成り、豐臣氏に於て極れりといふ。論豐臣氏檢地の一文も、固より政記の本文なり。山陽に死に臨みて草せる一篇、封建政治を呪ふ情見るべし。今に至りて行はれ恬として上下怪しむ者なしと激語する所、陽に豐臣氏を責めて、陰に德川氏覇業の悖戾を曲言せるもの、當時能く忌を免れし事、又時勢の然らしめしものあるによるか。是を以て之を觀れば、已に武家制覇の崩壞は時の問題たりし事を推察せらる。山陽が、政記卷尾に、豐臣氏聞竿の法、先王の制を一變せりとの論を置きて、以て劈頭の神武記に照應せしめ、之を全卷の括りとせる所、其不朽の精神を看取すべし。但、山陽の修史が、日本政記に於て、敢て神武以前に遡る事をなさゞりしは、國史古典の研究漸く盛となりし當時に在りて、然も親房の正統記の如きを推賞しつゝある彼として、實に不可思議なる現象なり。吾人は强て之を解釋せんとするものに非ざるも、山陽が前に五帝三王の時代を神祕的に解す事を否定せる如く、國史に於ても之を云ふに忍びざるものありとなせるによるものなるやも知れず。國史の最も重要なる部門たるべき神代を、莫得而知焉といひ、鴻荒之事和漢同然置而不論可矣と稱せるは、此間の消息を暗示するものなるべし。夫の實際家山陽にとりて、一切の神祕は、若し合理化されずば、全然存在價値なきものたりしなるべし。蓋、彼の强烈なる情熱の裏には、常に冷靜な

る實理を潛在せしめたるものなればなり。是、彼が修史に當りての一得にして一失たるを免れざりし所ならん。

山陽の事業と其精神に就きては、大略叙上の如し。次に之を彼が行跡に就きて再檢討せんが爲に、先づ自叙傳的に生涯を調査し、行跡並に業績の世評を考慮し、最後に精神的感化の實證する所を明にせんと欲す。

山陽の脱奔前後までを一瞥するに、彼は嚴格なる父と人間味に富む母との間に生長し、成童才學を以て頭角を表せり。而して、彼自身、拔群の志あり。少年にして能く古今成敗を論じ、老成の口吻ありしは、生涯を已に約束せるものあるに似たり。脱奔前、遊蕩あり。原因、固より一に歸す可からざるものありしなるべし。察するに、春水よりせば、唯一人成長せる才子山陽を、己が如き端正なる宋學者として仕上げ、家業家督を嗣がしむべくありしならん。故に一日も早く結婚せしめ、身を固めしむるが第一策にして安心事なり。然れども、一度は親思ひの山陽とて、父の志に服せしものの、欝勃たる雄志は、自ら安んぜざるものあり。終に自棄的冶遊に走り、青年の血氣、所謂、心得違ひをなせるものなるべし。然も寛政十二年二十一歳の九月五日、決然として脱藩を敢行するに至りしは是非もなし。かくて屏居の身として復歸して後は、稍〻志を伸ぶるものありしが如く、專ら文章に身を託せり。彼一代の志、此に略〻決定せるものなる可く、未だ決行の機を得ざりしのみ。閑門修レ史出レ門遊。時逐二吟朋一上二書樓一。落日蒼茫千古事。毛陶戰處是前洲。とは當時の生活を物語るもの、二十八歳の作なり。

簾塾出入前後を見るに、彼が獨自の志望を實現すべき第一歩は、茶山の簾塾行によりて始めらるる事となれるが如し。時に文化六年十二月二十七日にして、山陽三十歳の誕生日たり。然れども、夕陽黄葉村塾、固より安住の地に非ず。要津に據るの單に手段のみ。即ち、俠門抱レ病早抽レ身。十歳烟霞志未レ伸。桎梏空過少年日。文章方値太平春。由來大翼思二冥海一。何不三先鞭據二要津一。窮巷偏驚梅柳色。幾回磐折過二鄉隣一。とは、三十一歳の作、僞らざる告白といふべし。而して、當時は勿論、常に山陽の力となりし人は、藩用人築山喜平と心友篠崎小竹となり。かくて、此等の力に頼りて、處士として自由の境遇に自適しつゝ、一代の志業、文章報國に邁進せんとて、萬難を覺悟の下に、茶山塾を後に

し、先づ大坂に向つて發足せり。時に、文化八年閏二月六日、三十二歳に當れり。

上京初期は、新に小石樫園の周旋に頼り、家塾を開きしが、事によりて一時離京、又大坂にもどり、再び上京して開塾、德太郎の稱、之より始まる。彼の貧しき獨立生活は、あらゆる非難の中に進行する事となれり。恍見親闈欣且行。紫扉松逕甚分明。纔逢弟妹未交結。夢破牛車過巷聲。といひ、一出鄉園歲再除。慈親消息定如何。京城風雪無人伴。獨剔寒燈夜讀書。といふは、三十二歳の作、親族を逃れ、異鄉に中傷讒誣する輩はあるも、心を語る友なき彼が寂寥、夢は常に慈親弟妹の下に走りし事、同情禁ぜざるものあり。書簡類に自ら述ぶる所と併せ考ふるに、彼が懊惱は、家計の上よりも、寧ろ此にありしものの如し。

勘當宥免より父春水の死去前後は、山陽の生涯の轉換期たり。文化十年三十四歳の三月四月の間、春水、京坂巡遊に當り、始めて勘當許され、父子對面あり。鄉里に在る山陽の遺兒餘一も十三歳に成人せり。然も此頃、山陽の再婚問題あり。彼が意中の才媛、江馬細香とは終に結ばれずして、梨影との結婚生活始まれり。文化十二年三月には茶山も入京あり、山陽にとりては、漸く日蔭者の生活を脱して、明朗なる生涯に入り、自由の志を伸ばさんに遠慮なき境遇となれり。然るに、十三年二月十九日、父春水七十一歳を以て歿し、彼の心境に又一大變化を來せり。即ち三十七歳の春に當れり。

三年の心喪を終りし山陽は、心氣此に一轉して、九州巡遊の途に上れり。廣瀨淡窓其他の豪俊に會し、又馬溪、天草の奇勝に接し、或は筑後川に菊池氏の精忠を懷ひ、或は又碕港に異國の情景を察し、詩文に又書畫に、大に平常の希望を滿足せしめて、やがて母を携へて歸京し西遊期を終れり。文政二年三月六日出發より三百二十二日目文政三年二月四日にして、一旦廣島に歸着し、三月十一日歸京、途中別れし母、大坂より十九日に入京あり。即ち京住公許、老母奉養の期に入る。

これより母を奉じて嵐山其他の勝を探り、又家計の如何を顧みず。然も世人は、母を擁して遺財を私せんとの意に出

づと誹る者あるを免れざりき。文政四年十月、終に京寓一件公許あり。母に一書を送りて、扨々年來の心懸是にて夜明候樣に被思無此上義に御座候との感銘を述ぶ。文化十一年舊藩を去りてより十二年目、公私始めて自由の處士として立つ事を得るに至れり。實に四十二歳の時にあり。脫藩以來、正に二十餘年にして始めて此に素志貫徹さる。而して畢生の大業も着々完成に赴き、愈々山陽自身の生涯の展開來る。

京永住、新居落着より外史上進、政記起稿の頃は、山陽の最も輝かしき生活期なり。彼は、文政四年九月頃より京坂何れに居すべきやに迷ひつゝありしが、翌年十一月九日、京都東三本木南町の新居に移轉、此に永住の決心を定むるに至れり。舊寓の題名を其儘に山紫水明處といふ。此より十年にして多事波瀾の生涯を卒るの地なり。此年正月三日、母に一書を送りて、久太郎に復す旨を述ぶ。但、ヒサと訓むは、やさし過ぎるが故に、キウと音讀する由を記し、ヒサにては四十づらに相應せぬとなり。かくて名實共に生來の相に復せる次第なるが、其間二十の星霜辛苦の中に經過せる事、ヒサよりキウに變化せしめし所以なるを思はゞ又今昔の感なき能はず。此頃、幾度か母を迎へて奉養怠るなき事いふ迄もなし。山陽、疾有り、詩に曰く、母在恐二先死一。兒亡寧再生。著書多二鹵莽一。誰肩助レ吾成。と。老母を案じ、學業を憂ふ。文政十年五月二十一日、日本外史を樂翁公に上進す。時に四十八歳なり。修史偶題十首の中に、二十餘年我書を成すといふ。此年八月十三日茶山八十歳を以て歿す。山陽にとりては多感の年といふべし。文政十二年正月二十五日、樂翁公の外史題辭成る。山陽の宿志此に成る。此年の送母詩にいふ。五十兒有二七十母一。此禍人間得應レ難。南去北來人如レ織。誰人如三我兒母歡一。と。滿足の情、字面に見ゆ。

天保元年、母の病により歸省し、後、京に地震あり、彼も病を得て苦慮しつゝ又歸京する等、何となし慌しき年を迎ふ。圖らざりき、これ彼が晩年とならんとは。年少起稿せし新策に本づきて通議一書新に成り、政記も忙中弛廢しつゝ猶繼續さる。天保二年、書懷一首に云ふ、著作無二人堪一レ託レ意。家鄉有二母毋關一レ心。茫茫身世憑レ誰計。悄倚二殘燈一伴二獨吟一。と。彼が痛心する所は、愈々益々老母と著書の二事に在り。又、尾道小品六首の後に附識して、中に特未レ知二其

時世界果何狀、依然鼓腹擊壤乎否一也。の語見ゆ。幕末の大勢も已に豫感せられ、内外共に安からざるものあり。かくて年遷り、天保三年六月十二日咳血、終に死の宣告を受く。爾來九月二十三日死に至る迄、政記の成稿に邁進して斃るゝも猶止まず。九月十九日の書簡を母に對する絶筆とし、通議内廷論を文章の絶筆として逝けり。

叙上の行跡に對して世評は種々に分る。史鑑の著者、武元北林、文化八年山陽上京するや、與賴子成書を再度致せり。山陽東上後、娼妓に淫し負債に苦しみ、既に備後に逃るとの流言に就きての忠告なり。其流言の根據は、金山重左衛門の威嚇的警告による京都落と其際に於ける樫園の別宴等を誤傳せるものの如し。故に北林も、頃登々兄歸省、熟二聞足下事情一、疑念稍釋。といひ、更に、足下與二吾兄一同在二京師一、相切劘、相匡救、更令二美聲入二我耳一、則僕之喜何如。との友情を述ぶ。然も、茶山の如きすら口を極めて譏り、山陽を誤解せるものの如く、伊澤蘭軒に送りし書簡の如き其例なり。既に然れば、利害生ぜる者、京儒の中に於て美聲の出づべき道理なし。而して不如意の家計を遊歴によりて潤筆料の收入より補ふ結果、父の如きも旅猿と稱して爪彈きする次第、山陽の苦衷同情すべきものあり。開塾に當り教科書も弟子も小石塾より借り來る有樣なれば、普通の人情を以てしては、山陽を容るゝ事難かるべし。況や何等の同情なき者をや。故に潤筆の如きも筆惜みすといひ、又潤筆料を定めたり等といふ事につきて專らの評判を傳へらるゝに至りしも、是非なき所なり。身に恒産なくして家鄉を離れ、幾多前輩の中に突入して一家を成さんとする苦辛、必ずや筆舌に盡せざるものありしなるべし。文政七年九月二十日、市川三亥塾の門人、海老原敬なる者、病父を慰めんとて山陽の書を土産に所望せる際の情景を報じて「先生至極之御機嫌にて、少し眼中に涙をさへふくまれ候樣に相見申候。親を大切に存ぜられ候德孝相見申候。一體、先生、筆惜みと、世上の俗人に申され候程の人に御座候由に、米莽申候處、右之始末に御座候」とあり。豈、利を守るの俗物と斷じ去るべけんや。山陽は書畫を嗜好するの餘、人の非難あり。田能村竹田いふ、子成嗜二好書畫一、多方購求。輕レ貲不レ嵩。甚二於書卷一。と。書卷より甚しとあるは、人の非難の發する所以なり。本職たる學問を等閑に附するに似たるのみならず、かくして他人に借りて讀書するが如きは、第一迷惑を懸くる上

に、其學精なる能はずと看らるゝ所以なり。然も書畫を購求するは未だ可なり。人の珍藏を知れば、求めて止まず。即ち又曰く、子成執レ意甚確。已之所レ欲。人不レ與亦必取焉。と。東遊西遊常に此事あり。夫の大鹽中齋の如きも、愛藏の軸物を擲たしめらる。心友に在りては割愛するも恨む所なかるべし。之を萬人に强ふるは不可なり。故に、書卷の如きに至りては、寥寥として數部のみ、平日之を朋友の處に借りて此を讀み、讀み畢れば即ち返すといふは同情ある叙述なるも、巖村南里の評の如きは之と異れり。即ち、山陽は行跡に於ては一向反省の樣子なく、書畫器玩を貪り集めて假りて還さざるに至り、然も豪傑を以て自ら居り、忠孝氣節を詩文に著し、以て自ら緣飾すといひ、孟子の所謂穿窬の類なりと極言す。金井烏洲の如く、志を時に得ず、憤を墨に泄すとなす者もあれど、概して當時の保守的一般人士看る所は、文人山陽を認むるも、士君子として山陽を容す事なきに似たり。夫の猪飼敬所の如きも、少年無行、父の家を繼ぐこと能はず、これを以て世の正人に擯棄せらるといひ、其門人にして山陽と善き、齋藤出雲も、山陽今四五年も在世、先生と親交せば、君子風之人となるべきに惜しといひ、敬所も同樣の觀察をなせるものの如く、余於レ人有二悔一。壯年不レ知二履軒之學識一。故不二從レ之學一。老年不レ知二山陽之奇才一。故不二與レ之友一。如二此二子一。豈易レ得乎。と稱せり。然も畢竟、才子は君子に同じからず。山陽を才子と看るは、之を文士視するに外ならず。學者すら未だし。況や德行をや。龜井昭陽の所論に、人物は奇才子也、學術は無何也、文章は才機尖尖如虎放於原といひ、忠孝操行を以て責むるは子成を責むる所以に非ずとなすが如きも、亦德行は暫らく置き才子を以て視るに似たり。山陽自ら曰く、吾刻苦立言。以爲學者之事畢矣。然非二德行一。無以進二聖賢之道一矣と。即ち彼自ら德行を以て居らず、學者を以て遇するに似たるも、固より自謙の語にして德行を理想とせるは言外に含まる。山陽の知己に在りては、世評の如く一才子として看過する事なし。小竹の南北正統辨に曰く、嗚呼子成平日以二人倫世道一自任。抵レ死不レ衰如レ此。非二一代偉人一哉。世徒以二史學文章一稱レ之。非下知二子成一者上也。と。竹田の如きも、世、子成を目して倨傲無禮とす、然らず、となす。然れども衆論は之に反せり。夫の淡窓の如きすら、余眼中のしる所、此人より才あるはなし、其人となり、簡傲にして禮なく、又利を

貪る、是を以て至る所、人に惡まれ、往々に其地を逐ひうたれたり、惜いかな、とて、世の巷說以上に出づる評なし。かゝれば流石の山陽も、西遊中の誹謗につき、茶山へ一書を送りて、京師にては、小生を色々不評仕候もの有之よし、京へは歸らぬつもりなど申觸し候もの有之と、留守より申越候、甚則先生左樣被仰候など、申聞候ものも有之など承候、如何なれば小生は蒐角得二猜忌誹謗一候事にやと奉存候、と訴ふるに至る。是等は、山陽の文名高き事、其最大の原因ならんも、猶中傷者の乘ずる機を與へし一事、山陽自身一半の責なしとせず。山陽遺稿附載の江木鰐水撰山陽行狀に對し、同門の森田節齋が反駁を試みしが如き、例せば、學問に於ては、經世を主として宋儒の說を信奉せず、洛閩を主とするも甚だしく墨守せざるあり、年少にして卓犖不羈、稍〻長じて酒樓に出入し、壯年名教を以て任ず、不孝不忠、君子の風なく、言行背戾、穿窬の類と誹らるゝ所以なり。山陽の形式打破は、年少より晩年に通じて一貫せる精神にて又事實たり。彼、三年父の心喪に服すと雖も、忌明の精進落しを待ち樂しむ事を公言して憚らず。又母を奉養しては、酒樓に盛宴すといふも、敢て否定し諱むべきものに非ず。如此は何れも山陽の眞面目にして、人間山陽の本色を示すもの、世の僞君子と異る所なり。小竹が春水遺稿後序に述ぶる所、大意に曰く、人或は子成背て先生の儒職を襲はず、客土に浪遊するを嘲り、是先生忠孝の道、訓導の功、國人に行はれて子に行はれず、則其文空言たりと、是子成の寃にして先生に波及するものなり、とて、春水の教育價値をも誣ひ、子成を中傷せんとせる巷說より論じ、子成父の職を襲がずと雖、父の業とする所に至りては、承繼して美を濟す事、天下知らざるなしと云ひ、若し出處父に異るを以て輒ち罪して悖倫に歸せしめば、則ち是逸民に君子無しとして可なるかと反問し、或は目するに不肖を以てして、先生の文行を併せ累せんと欲するは、小人、人の美を成さざるの喩の如きのみ。篠と賴とは父子共に道交あり。世の行旅の人の言とは自ら別あり。父死しては心喪三年、母を迎えては、有亡を問はず、隱居不仕、禮聘不應、先生の遺訓卓然效有り、詩文大半忠孝倫理に係はり、中誠の外に發するもの、子成の風節自る所有り、空言に非ずと。平心にして聽かば、敢て失當遠き事なかるべし。

次に業績に對する世評の種々相を一考せんとす。即ち、其經學、詩文、修史の業に關し、先づ經學に就きて見るに、門人村瀨藤城いふ、先生人に敎ふるに、節義を以て先と爲し、瑣瑣たる小冊と雖も、敢て忽にせずと。山陽の經學研究態度は、大意適用主義に在り。然れども節義の係はる所を忽諸にせざるは、單なる粗大に非ざるなり。然るに、吉村秋陽、山陽の通大意的治經の法を以て、彼粗豪の性、細心讀經に耐へざるが爲なりとし、兒子、老成の語を爲すのみと評し、而して、文章に於ては、晩年文人を以て處らず、經學者振りしに異り、終身得力の在る所、眞實話ありとし、細より大に逐段細繹して大を悟る可きをいふとなす。此も亦山陽を文人視する輕侮の念に出でしものの如きも、彼が語錄に述ぶる治經の說の如き、全く山陽の口吻其儘なるは却つて一奇なり。或は彼にして始めて老儒老成の眞實語をなすといふものならんか。皆川淇園は助字詳解に於て暗に山陽を攻擊して、後世は餘程すぐれたる人も、書を讀むには、其大義を領すれば足れりと云論などをも言出すことになり、それを一豪傑のなすべき仕かたと思ひ、それより細心に書讀むをば、嘲りて、文字章句の儒など言なして、愚なる仕業の樣に謂ふことも出來たることになれり、此は全體のわけに味く、且己がわざの所詮左樣の吟味にとどき難き故に、强て右の如くに柱げて言取りて、勝手に自慰して言へる偏見の說なりと思ふべし——されば大義に通ずることを事として、文字章句を事とせずと云へるは、何ものが言たるにもせよ、身勝手にまかせたる仕方にて、細かに思はざるの過なりと思ふべきことなり、されば讀書は其言へる物事を識りて、それを己が心の目算に通はして知ることなりと心得ること、甚しきひが事なりと極論せり。客觀主義に立ちて、山陽をば小主義的に解して非難せるものといふべし。果して山陽の說は、單なる主觀主義に墮するものなりや。佐久間象山、山陽の學、世用に當るを推稱して曰く、迂濶固陋、爲二世學之通弊一久矣、求下其辨博縱橫、究二知當世之利病一、如二賴子成一者上、殆絕無而僅有也、と。已に洋學を修めたる象山に取りては、氣宇の小、學ぶ所なきも、山陽學の態度に敬服する所ありしなり。山陽の經學は、所謂の經學者と異れり。此に經學なしと見るは、從來の見に執はれし言のみ。

山陽が詩文の奇才たるは、定評存する所、天下の殆ど公論たり。菅茶山の遊藝記に、其才氣九歲小兒の時に已に秀發

せるをいひ、廣瀬淡窓、懷舊樓筆記にも、德太郎、其才力又遠ク父ノ上ニ出デタリと見ゆ。廣瀬旭莊は、山陽の詩を評して、詩として缺點に滿ち、人喜まずとの意を述ぶ。金剛山帖の小竹跋文に、竹田、子成の詩は體を具へたりと雖も特に大を用ゐるに巧みなりと云ひ、子成、以て知言となせりといふ。正岡子規が、國民之友、藻鹽草に賴山陽の詩書畫、皆同代諸家未得の所に徹底すといへるを評し、未だ淺く一も徹底せず、博き處、諸家を壓倒せるのみとなせるは、又竹田の、其畫固未レ工、而嗜好之深、染濡之久、加レ之讀書萬卷、風趣逸上、自有レ足レ觀、得者寶重、以比二圭璧一、といふものと略ゝ符合すといふべきか。山陽の詩文は、世の以て失となす所が實に得意の存する所たるなり。即ち、鷺津毅堂、鈴木光風所編の山陽文錄に題して、山陽賴子、嘗て文評を一齋佐藤翁に乞ふ、翁頗る改竄する所あり、山陽未だ肯て悉くその說に從はずしていふ、翁の筆は細絹の如く、我用文は緜布の如し、細絹は貴きは則ち貴きも、以て綿布を補綴すべからずと、其の卓然として一家をなせしもの、此に在り、字句の精粗に就てその巧拙を論ずるがごときは、いづくんぞ以て山陽を知るに足らんやといふが如き、其證なり。小原鐵心、三宅樅臺所著の山陽詩鈔集解序に、詩の如きに至りては則ち唾餘のみ、而も唾餘亦憂國の餘憤に出で、而して一に心血の注ぐ所なりとなすものは、山陽の平生の言を取れるものといふべく、山陽自ら詩文餘技なるも彼にとりては一般の文人と異ありと稱するもの此に在り。門人節庵、重刻通議の序に、抑も亡友野本萬春、先生を論じて云へり、先生の學、及ぶべからず、先生の詩は及ぶべし、先生の識は及ぶべからざるなりと、蓋しこの篇を讀みて言ふ所にして亦善く先生を知れりとなすといふもの、固より山陽の文章論を逆言せるに似て新說に非ざるも、亦能く山陽の詩文の性格を道破せるものなり。拙堂、韓蘇詩鈔の序に、山陽の骨力昌黎の如く、才識東坡に似たるが、彼平生二公に心醉し、詩詞に於ても亦然りといひ、その眼光の大、二公に慕ふ所、詩詞のみに非ざるを述ぶ。故に、山陽の詩文は、特に其經學史學と密接なる關係に於て見るべきものにして、單に文人の詞藻を以て見るは、斷じて山陽の本意に非ざるを知るべし。

修史の業績につきての世評は已述せる所なれば、又更に述ぶる要なし。橋本竹下、山陽の訃音に接し、弔意を表して

詩あり、曰く、垂白老親仍在レ世、游魂應向二故山一歸上、死日更聞レ論二正統一、平時自愧レ喚二文人一、と。前論と併せて知音の語見るべし。又方外莫逆の友雲華、同年冬旅宿の床に山陽の揮毫せる幅を觀て、淹忽死生可レ論、幽明有レ道不二昏々一、知君著作餘二身後一、一片丹精報二國恩一、の詩あり。明治維新の大業の一端、山陽修史先倡の功の存する所、萬人異論のなき事實なり。

最後に、精神的感化に就きて、其門人、遺兒、私淑の人に及び一考せんと欲す。先づ、幕末多事の機運に會し、山陽の門人が如何なる動をなせるや、山陽の感化として又注意するに足るべし。關藤藤陰は、永戸の藩士と親交あり。種々烈公の爲にも畫策奔走せしが、幕府の内命によりて、外交上、浦賀、下田、北海道、樺太等に使し、老中阿部正弘の爲に活動せる事、單に德川一家に忠なるものと異るを見る。藤陰は、藩主阿部正敎の侍讀となれるも、唯一藩の爲のみ圖りしに非ざるや疑なし。嘗て、藤陰水戸の東湖を訪ふや東湖詩あり、大丈夫結髮志願存、顚沛豈敢忘二報國一と。藩國に報ずる小忠は、幕末次第に失はれ、天下國家を指すに至れる時勢なれば、此亦四外に對する日本國家意識の上に立てる言なるべく、藤陰の志と雖も東湖と異る事なかるべし。是、彼等平常行ふ所に徵して知るに足る。又、江木鰐水、福山より藤陰に海防事宜を送り、鹽谷宕陰は、松平春嶽に召されて、之を疏せる事あり。其他の門人も時局に處する所の活動をなし、門田朴齋の如きは、阿部正弘に諫言して侍講を免ぜらるゝに至れり。文久三年七月、森田節齋は備中倉敷にありて、上中川宮書を作りて捧呈するあり。此年當時、攘夷親征に託して幕府を倒し王政復古をなさんとする策謀あり。中川宮は朝廷に於ける其反對者の一人にして、志士浪人或は直接行動に出で、中川宮等の諸家に投書して威嚇するものありし時の事にして、八月十三日廷議初めて決したりしも、八月十八日の政變により、中川宮は勅を宣して、大和行幸を停め、三條公以下の失脚西走に一段落せる事實を照合せば、節齋の上書又察知すべし。

橋本竹下、山陽の訃音に接し、挽歌あり。中に曰く、客冬西觀滯二我園一、豈知今日悲二永別一、所レ恃賴氏大小兒、早晩善繼二乃翁志一と。門人等が先師の遺兒に期待する所の情略推測せらる。勿論、門人と雖も一樣に非ず。梨影夫人の書簡

に見ゆる如く、親切ごかしの薄情をいふ者もなきに非ず。然れども、梨影述懐の書簡に、十九年の間に候へども、あのくらいな人を、おつとにもち、なか〳〵でけぬ事と、有りがたく存候、此上に、子どもらの所、よき人にそだて度、是のみたのしみ存候、とある信念は、終に賴氏を辱めざる母として遺兒を成育せしむるを得たり。半庵、異母の遺孤たりと雖も、二弟の爲に善く圖り、父の名を立てんとす。百峰への書狀に、扨、此度の凶變、不獨一家私哭、爲天下、可痛哭候事に御座候、何卒此處にて先人の學派枯渴不仕、混々達四海候樣、御互に奮發大激昂此場合に御座候事と被存候と、互に警策する心情見るべし。天保四年、聿庵歸藩、尾藤水竹送序に、崎門の外いふに足るなしと江戸の學界を評し去る事見ゆ。天保十二年、三樹早くも十七歳たり、在江九年三十六歳の藤陰が歸省の途次來訪せるを迎へて詩あり、吾辱即是先君辱、大業不成奈此躬と。又志を見るに足る。三樹が後年、松陰へ送れる書簡に、憂國愛君の眞心、已まんと欲するも能はず、五内之が爲に裂破せんとすと、志士の熱情の溢るゝものあり。是安政五年四月二十五日にして、此日又星巖へ書を送り、近衛忠熙を說得し、攘夷密勅を水戸へ降す件を承知せしめたる趣を報ず。同年七月十日には、星巖の宅にて西鄕南洲と會見あり。九月終に安政大獄に坐して江戸へ送らる。其死刑後、鹽谷宕陰、埋葬につき考慮しつゝありし處、已に大橋順藏埋葬せる事、其天下の嫌疑を憚らざる行爲、人の推稱する所なり。元治元年正月、毛利敬親、之を世田谷に改葬、現に吉田松陰等と永久に東都の西南に眠る。同十月、幕士松岡萬、其際遺骨一片を得て其家に祭りしが、小塚建碑の事あるに當り、遺骨を瘞め、其緣由を刻せり。中に於て、嗚呼三樹雖死、若其精忠勁節、則與天壤不泯滅矣――幕府小臣松岡萬識といふあり。幕臣に此事ある、時勢とはいはんも、何等の狀ぞ。是より先、萬延元年二月、江木鰐水は、舊門人にして大橋塾に在りし黑川浩藏と同道、東山山陽の墓に詣り、心事を墓前にて演述する所あり。不覺落涙すといふもの宜なり。山陽夙に三樹を奇とせしが、今日果して此に至る。安政二年九月十七日、梨影歿して此日に會はず。生前已に賞賜を受けて貞節を旌表さる。山陽、三樹、王政の昭代に至り、追贈しきりに降り、祭粢又加へらる。支峰は迹を戢め隱處して身を終るに至ると雖も、山陽の家學を守りて失墜する事なし。山陽豈

庭訓なからんや。

山陽を私淑する者、固より記錄の徵すべき無しと雖も、天保三年十月二十四日、清道光十二年、清國錢梅溪、沈蘋香が長崎來泊中に求めし、山陽の日本樂府を贈られ、五律二首を作り、追慕の餘、小屏風に添へて京都の賴家へ送り、三年の後到着せりといふ。詩末に、聞說扶桑近、高攀未可躋とて戀々の意を記せり。松崎慊堂日曆同年十一月二十一日の條に、留鹽谷生來といひ、次で賴子成五十三死と記せり。又山陽咳血歌の作ありし事をも記す所、宥陰と山陽を語りて時を移せるや疑なし。前輩にして心を山陽が爲に動かされし者、慊堂一人に止まらざりしなるべし。岡本花亭の如き八十翁にして、賴子成を悼むとて、欽有留名稱死後、恨無識面及生前といひ、稻垣研嶽、山陽の居を寫せる梅關の水西帖に題し、又追憶追慕の情を述ぶ。夫の維新の大業に參ぜる山內容堂の如きも、山陽の著書を愛讀せりといひ、又伊藤公等が、日本政記によりて志を養ひ、他日の用に供せる事、歿後の山陽の影響を知るの例たり。

さて本論の眼目は、一、家學に於ける矛盾と、二、事行に於ける矛盾の二問題の解決にあり。而して前者に就きては已に略說せり。故に以下山陽に發見せられし事行の矛盾を結論せんと欲す。之を一言にせば、修史に於て忠孝の大義を大聲疾呼する山陽が、年少よりなせる行跡は盡く反噬して其主張を裏書するものなしとする問題の考察に歸す。

抑〻山陽の修志に專心するに至りし事實につきては上述の如し。但、此に山陽が何故、賈誼等を好み、經術の論にも相當力を注ぎつゝ、更に進んで彼の所謂思慕する所の經世の實際行動方面に向はざりしかは、單に好惡、得不得意のみによりて決せらる可きに非ざるべし。蓋、山陽の家學を探究する時、彼が實際に其主張を實現せざるを得ず、經世家となるべき必然の發展を豫想せしめらるればなり。然るに敢て此に至らずして、單に修史にのみ一生を託すに至りしは何が故ぞ。想ふに、經世の事たる、山陽の主張を以てしては、當時の封建治下に於て實行し得るもの一もなきが如し。彼が王政を我國の本體として堅持し仰望しつゝある以上、現狀を破壞するか、是を率ゐて王廷を拜せしむるに非ざれば、彼の出でて仕ふる理論は發見し得ざるなり。故に彼は人材登庸を叫び、三善淸行を追慕する一方、大江廣元が經世の才

の適用を誤れるを惜みて止まず。又白石、鳩巣を敬しつゝ、之に倣ふを理想とせざるなり。蓋、白石等の如きも亦小廣元のみ。眞に日本を理解せる經世家にては非ざるなり。然も山陽に在りては、封建破壞も、王政維新も、共に其地位に非ず、其時機にも非ざるを知れり。清行の風を慕ひ、退きて世人の蒙を啓き自覺を促さんには如かず。彼が修史の意義、吾人の觀る所、實に此に存す。故に春秋の筆法を以てせば、山陽は實に封建を打破し王政維新を實行に移せる者といふべし。彼が三十餘年間に吐露せる精神、修史詩文によりて天下の耳目となり、終に幾多の廣元を出して然も其才を用ふる所を誤らざらしめしものが今日ある所以なるを思へば、かくいふも敢て過言に非ざるべし。是に於て、翻つて彼の行跡を見るに、其全生涯に於て全く過失なしとは云ふべからず。彼が君父の國を脱れて浪々せる一事の如きは、保守主義者よりして、一言の辯解を容るるの餘地を與へられざるものなり。夫の履軒一黨の峻嚴なる態度即ち是なり。而して又人の才を成さしめざらんとする小人の得て乘ずる機となり、惡用さるゝ方面よりしては、蚊虻の去來するが如く始末に困るものあり。かゝる中にありて、篠崎其他の一黨、能く正を發き勇を鼓するによりて、山陽は辛うじて全きを得たるなり。此の如く山陽の障碍となれる問題の根本原因は如何。想ふに山陽は、思想的には封建の非を叫びつゝ、現實的には家門に寸毫も累を及ぼさゞらんとし、藩國に對する忠誠の念に於ても、偏へに缺くる所なからんとせしが如きは、其意識すると無意識なるとに關らず、一大矛盾の事實なり。此に小人の利用する隙の存する所以にして、彼が此矛盾に徹底せず、二重の態度を持する限り、彼に對する非難は終に解釋し得ざるなり。是に於て其所謂忠孝の概念につきて吟味せざるべからず。山陽に於ては、國體觀上に立ちて皇室中心の第一義的忠孝を理論的に高調する一方、藩侯との主從關係を共在せしめて怪しまざる所に第二義的忠孝をも滿足せしめんとする矛盾を犯しつゝあるものなり。夫の後年四十を過ぎて、京住公許の事あるや、夜の明けたる如き心地せりとなす心理の如き、是偶〻父春水に對する孝心が無條件的に傳統精神を受け容れしものとなす外、彼の理論を活かす途を發見し得ず。彼は理論と實際とに於て、かく忠孝を二樣に使ひ分けをして憚らざるに似たり。これ時勢の致す所か、山陽の實行力の不足によるか、兎もあれ、問題は、此二

重性を調和せしめんとする所に存すといはざるべからず。蓋、此矛盾の存する限、山陽が德行を以て世の口を塞がんと努力する程、彼を苦しむる良は自ら强く張らるゝ結果とならざるを得ず、彼が公然一處士として、自由の境地に立ちて自由に論議する時、彼は完全に父祖の國を無視せざるを得ざるなり。但、事實は彼が理論上にのみ止まりたるが故に、直接此矛盾より來る重大なる結果が身に迫る事なかりしのみ。然れども肉體的生命の安全を除くの外、精神的彼の致命傷たる事行不一致の誹謗は到底拂拭し去る能はず。加之、彼の自ら信ずる事の厚きと、貧しき家塾の經濟事情等は、世間が彼の性格を誤解する上に一段の資料を提供したるの觀あり。

かくして山陽は、生前死後非難の聲を絶たれず、生に安んぜず、死にも冥せざるかの觀あり。此矛盾の苦は、已述の如く家學上の思想面と事行上の實際面と二重に彼に迫りしも、彼は何れに於ても、矛盾の儘、自らは之を調和しつゝありとなし、世の非難を謂れなきものと解せるに似たり。こは勿論單なる中傷に於ては固より可なり、然れども、非難の淵源叙上の如く反省の要なしとせざるものあり。然るに夫の三樹に於ては、此矛盾を止揚して、終に徹底身を危險に投ぜるものの如し。三樹は、山陽の理論を終に實行に移すに至り、矛盾的思想及現實存在と戰ひ、肉體は滅びて敗れたれども、萬古不朽の精神的生命を勝ち得たるものなり。想ふに山陽をして若し三樹の時代に在らしめば、彼も亦此に至りて止みしならん。事實、山陽は二十年後の時代今日の如くならじと豫言する所あり、偶〻三樹の活動期は、彼の所謂二十年後に當れり。故に、山陽の活動は、三樹に於て實現せられ、終に彼の矛盾は、第一義面に於て克服せられたるものといふべし。而して山陽が廣元の爲に惜みし點を誤る事なく自覺して、先づ幕府を率ゐ、眞個日本國再建の爲に活動せんとする一面を、彼の門人等の運動方向に於て發見するが如く覺ゆるも、之に比すれば、三樹の方途は、矛盾せる現實の機構を破壞して、徹底理想を實現せんとする意義を有するものなり。かく考へ來る時、山陽が一生苦められて終に解決し了らざりし根本問題は、右の如く門人及遺兒等によりて解決の段階を發足せられしを知るべく、而して之が數多の私淑者によりて繼承實現せられし事實を見る時、山陽が近世史上に於て占むる地位も自ら明なるべし。

最後に文人山陽の意義を想起するに、山陽曰く、詩文を學ぶに一字訣あり、曰く眞と、又四字訣あり、曰く唯眞故新と。文に表現さるゝ眞とは、百般の事象の意義を把握せるものにして、單なる存在的眞僞の範疇に止まるものに非ず。これ文章が經國の理想を自負し得る所以にして、現實に即して當爲の世界を指示しつゝある所に眞實の意義存するものなり。已に眞なれば生命あり、生命ある所に新鮮味感ぜらる。名文とは、文に表現せられたる眞理性が呼吸する所の宇宙的生命に、我生命の觸るゝ時に起る共鳴が美を感ぜしむるものといふべし。山陽が、經學に於けると同樣に、文章を作りて實を要め、實なれば則ち用に適すといひ、其用に適せざるものは必ずしも作らずと稱せる意味も右の如くに了解せらるべし。蓋、實を以て直に卑俗視するは、事實と意味、換言せば存在的事實と價値的眞實とを混同するものにして、未だ山陽の眞意を解するものに非ず。山陽の修史は精神史の世界に於て論ぜらるべきものなり。之を單に空言となし文而已矣となすが如きは、眞の歷史を語る者の態度となすべからず。經學の如きものが、兎角過去の文化を祖述するに止まり、生命あるものを出す事なきは、意味的實事に是を求めざる保守的態度に禍せらるゝものといふべし。元來、文學の本義は經學的意味のものにして、山陽の文學態度が大義に存すといふは、此範疇に屬するものなり。山陽が偶々資料に乏しき身を以て、訓詁的態度を捨て、創作的生命の經學に向ひ、專ら立言に意を注ぎし所以のものは、必ずしも萬卷の書終に得難きが爲にのみ出でしには非ず、其事の無價値を知りて此に就きしのみ。乃ち、文も經も事も行も、山陽に於ては悉く道に關するものなる事を知るべし。（完）